

内山雅生編著

『中国農村社会の歴史的展開 ——社会変動と新たな凝集力——』

御茶の水書房 2018 年 xxxiv + 263 ページ

さとう よし へい
佐藤 仁 史

本書は、内山雅生氏が代表を務める2つの科学研究費による調査班が、山西大学中国社会史研究センターの協力を得て行った、山西省農村調査・研究による成果の一部である。その主眼は、農民の「個の自立」と農村社会に内在する凝集力とのさまざまな関係を、中華民国期から現代までの長期的な軸においてとらえることにおかれている。

第Ⅰ編「社会環境の変動」は近現代華北農村を取り巻く状況を広く分析した4つの論考からなる。第1章「農村経済の発展と脱農化・零細農化の進行」(弁納才一)は、長年にわたる自らの研究蓄積を踏まえたうえで、脱農化こそが高い流動性を有する中国農村の特徴であるとして、認識のモデル化を試みている。第2章「華北の寒羊・寿陽羊と日本」(吉田建一郎)は、1940年代前半における日本の中国綿羊に対する認識と華北農民の認識の違いを明らかにしている。第3章「農村における結核と労働移動」(福士由紀)では、河北省定県を事例として農村部における結核の伝播の背景に都市への労働力移動があったことが指摘されている。第4章「『社』と社会結合の変遷」(陳鳳)は、地縁関係と血縁関係とが重層して構成される「社」という基層組織の実態と変遷を具体的に概観する。

第Ⅱ編「『水利』と『宗教』をめぐる社会結合」は、人々を凝集させる駆動力としての水利や宗教に関する5編から構成されている。前半は水利についての3編からなる。第5章「伝統水利の争われる『公』」(前野清太郎)は、「洪洞県水利志補」の訴訟記録に着目して、水利利用を巡り具体的に主張された「私」や「公」の論理のあり方に切り込む。第6章「集団化と農田水利建設」(郝平)では、集団化期の水利政策が結果的に地域の現実と乖離した実態が示される。第7章「改革開放期の伝統水利関係とその変容」(祁

建民)は、1980年代以降の「四社五村」における水利関係を検討し、従来の共同関係が市場経済の影響のもと経営を軸とするものに変質しつつあると指摘する。キリスト教に関する2編では、第8章「地域の権力と宗教」(田中比呂志)が中華人民共和国によるキリスト教の統制の実態を村落檔案(公文書)から読み解き、第9章「『社会主義建設』とキリスト教信者」(馬維強)はキリスト教徒の体験や思想の変化に着目して、国家による地域の再編を検討した。

第Ⅲ編「農民の生活空間」では農村の日常生活に焦点を当てた4編を収める。第10章「大規模村落の集落と農地の空間構造」(小島泰雄)は山西省道備村周辺地域に普遍的な大規模集落の構造を農地との関係で分析し、市場圏社会とのかかわりでとらえる必要性を提起する。第11章「現代の廟会・集市」(毛来霊)は「会譜」という史料をもとに現代における廟会(廟の祭り)・集市(定期市)の概況を紹介している。第12章「政治権力と農民の日常生活の組織化」(常利兵)は1960~1980年代における道備村党支部の会議記録を基に、社会主義化におけるハビトゥスのありようを明らかにする。第13章「地域防衛と結衆の原理」(山本真)では、民国期の河南省南陽地区における地域防衛体制の基盤が多様な日常的紐帯のバランスにおかれていたことが示される。

本書は、中国地域社会史をめぐる国際共同研究の方向性のひとつを示すものであると評価できる。すなわち、現地のカウンターパートが発見した地方文献や民間文書を土台に、彼らと緊密な連携を保ちながら文献が生成された地域において詳細なフィールドワークを行う。そして、フィールドワークの期間を含め定期的に開催する検討会において、さまざまなテキストを読み込んで濃密な議論を積み重ねて行くなかで、奥行きのある歴史像を描き出すという方法である。本書に対して議論すべき論点は多岐にわたるが、新たな「凝集力」のありようにもっぱら焦点が当てられたため、人々のつながりを開放性へと向かわせる要素については、より多くの分析を積み上げていく必要があると感じられた。また、収録内容の統一性や討論の焦点が些か散漫である印象を受ける。本書においてはごく一部のみしか用いられなかった道備村檔案の全面利用によって、研究が進展することを期待したい。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)